

Cool, Sweet, and so Funny

Two DOGS and the DOG

一面、

純白世界。

積もった雪に足をとられ、

何度も躓きそうになりながら走った。

2人分の荒い息遣い。煌々と照る太陽。

やがて辿り着いた陸の頂上。

見るも無惨で、造り物のように滑稽で、それでも現実だった。

木の葉を1枚残さず落とした巨木の幹に、四肢が磔にされていた。

頭、胴体、腕、脚　計6個に刻まれた、オヤジだったもの。

太く頑丈なクギで、打ち付けられた肢体。

全く奇抜が過ぎて、恐怖すら忘れた死体。

「オヤジが殺されるなんて……」

となりで呆然と、そいつは言葉を失くした。

「オヤジほどの人が殺されるなんて」

怒りで震えるそいつの声、拳。

オヤジの流した血が、幹に乾いてこびり付いている。

赤黒く、変色して。

ただ。ただただ白いだけの世界。

赤かったであろう血は黒く。

オヤジの顔は青白く。

その唇は紫で。

俺は、

俺は。

叫んだ。

過去は産物であり、付加物であり、軌跡であり、遺跡である。

俺は時の流れの中に生きてるのだから、生きてる以上、時は進むのであって、すべては過去に流される。

創りたくて造るんじゃない。作りたくなくなつて創られる。

過去を足跡だと比喻したところで、見てくれる人がいなければ風化し霧消するものだ。

当人である俺ですら滅多な事では振り返らないんだから。

産物、付加物、軌跡。けど、遺跡。

発掘志望者、どーんと求む。

いや、うそ。うそ。うそ。

知ってる人が知ってればそれだけで十分。

見てた人が見てたつてだけで、それで十二分。

「てなわけなんです。まったく聞いてないでしょ、キアさん？」

顎を撫でていた手を止めると、細めていた猫の目が丸く開いた。全身灰色、毛並み美しい猫。

「んーっと」

しばし見つめ合うかとも思ったけど、猫はすぐに目を逸らした。

「猫って、睨めっこが苦手だよー」

「負けたくないからじゃないですか？」

「なるほどー。負けないためには勝負しなきゃいーって理屈か」

「ポーカーフェイスが猫のポリシーですから」

「喜怒哀楽が激しい猫つてのも、それはそれで好きだけど」

「爆笑してる猫なんて見たくないです」

「感動に目を潤ませてる猫は？」

「……………いいかも」

「でしょ？」

「そんな話じゃなくてっ！」

大声に猫がビクついた。見上げるこいつに倣って俺も左に視線を上げる。

「急に大声出さないでよ。おかげで心臓バクバクだよ。心臓って一定の拍動で止まるの知ってる？ ドキドキさせればそれだけ寿命縮むんだから。今のでどんくらい縮んだかな　１分半くらい？」

「大した事ありません」

「1分半あれば、カップラーメンだってできるじゃないか」

「固めんじゃないですか」

「じゃ、カップスパ」

「固めんじゃないですか」

まったく、取り付く島もない。困ったちゃんだ。

「あ」

猫がきびすを返して（どこがきびすなのかはさておいて）タタタツと走り去る。その後ろ姿を名残惜しく見ていた俺は、

「オスカー」

「どこ見てんですか」

半目で見下ろす困ったちゃん。仕方なく、俺は屈んでいた体勢から立ち上がった。腕を組み、右足に重心を置く困ったちゃんは、おまけに小首を傾げて俺を見上げた。立ってみれば、この子がさほど長身じゃないとすぐにわかる。

「んー、で」

腰に手を当て、身を反らす。背骨のペキペキなる感触が小気味良い。

「何の話だっけ」

「やーっぱ、聞いてなかったんですね」

「聞く気あるよー。猫がじゃれ付いて来たもんだからさ。あと、長ったらしそーだったから」

「聞く気ゼロじゃないですか」

にべもなく言い伏す困ったちゃんを、やれやれと見下ろす。

「んで、困ったちゃん」

「誰ですか、それ」

「何の話だったか、も1回聞かして」

「困ったちゃんって誰ですか」

「食い付くねー」

あははー。

笑ってみても、困ったちゃんは無然とした表情。

「さっき自己紹介したばかりですよ。私はサヤハトリべって名前だっけ」

「変わった名前だねー」

「さっきも同じ反応でした」

「そのサヤちゃんが、何の用で俺に？」

『「しかも、こんな夜中に？」　それも同じです」

只今、午前3時。街の広場は噴水も止まっていて、街頭だけが頼りなく夜闇に灯っていた。さらに言えば粉雪すら舞っていて、朝には本格的に振り出す模様（天気予報情報）。周囲には人気なんて皆無　そりゃそうだ、こんな寒空の下、散歩しようなんてバカはいない。

そこで俺は、そのバカ。

「直接お宅を訪問するつもりだったんですけどね。こんなところで会えるなんて、幸運ですよ」

「俺んち、知ってんの？」

「知ってます」

「俺んちまで来て、何するつもり？」

「夜這いです」

「へー」

「突っ込んでください」

ボケたらしい。

「聖フィルデナント教会は知ってます？」

淡々と話を進めるサヤちゃんに、あー、と頷いてみせる。

「名前だけなら」

「その使いなんです、私」

そういうと、サヤちゃんはにっこり笑った。ぶすつとしてるより、はるかにいい顔だった。

「んー？」

「何ですか？」

「聖フィルデナント教会が、どうして俺に使いなんて？」

「ですからー」

またぶすつとする。露骨なため息まで添えて。

「オーナーが、キアさんに会いたいんですって」

「仕事の話かな」

「違うみたいですよ」

独り言のつもりが、サヤちゃんはしっかり応えてくれた。

「じゃ、何？」

「そんな知りません」

淡泊も、こうまで度を越してくれど、もはや爽快だった。

「とりあえず、教会までご足労願えませんか？」

「えー、やだー」

サヤちゃんの血管が切れる音が聞こえる　　というのはウソだけど、俺の言葉にプチツときたらしいのは本場で、細い吊り眉がヒクついた。

「私の事、なめてます？」

「いや、いやいや、そんなじゃなくてね。今、この時間にご足労願われるのがめんどい」

「それは困りますね」

うつむいて、サヤちゃんの表情が前髪で見えなくなる。

お。空気が変わったよ。

「じゃ　力づくでお願いする事になりますが」

声のトーンが低くなる。前髪の間隙から覗く左目が殺気を放つ。

「じゃ　力づくでも拒否する事にしましょー」

にこやかに応え　サヤちゃんの足が動いた。

「　　おっ」

蹴り上げられた右足を身を引いてかわす。空を裂く音、眼前の粉雪が重力を失う刹那、目の前の踵が迫って来る。

「わおっ」

さらに身を引く。だんっ　　地面に叩き付ける足。当たってたら相当痛そー。

一度蹴り上げた足を、重心を前に移しつつの踵落としに移行する　　いやはや、何とも器用なサヤちゃんだ。

「よけないでくださいよ」

と、右足を軸にした左蹴り。

「そーんな事言われてもねー」

さらにさらに身を引きながら、間一髪でかわす。

「当たったら痛いでしょ、それ」

コートのポケットから抜いた左手で、サヤちゃんの長い足を指す。

「俺は女の子に痛めつけられても嬉しくないの」

頭の隅に、1人の女の顔が浮かぶ　　あの時は痛かったな。

「だったら、大人しく教会まで来てください」

「えー」

「続けます」

地を蹴り、サヤちゃんは一気に距離を詰めた。突き出す掌底を払うや、彼女の重心が沈む。

やば。

とっさに腹をかばった瞬間、衝撃　　！

「っ！」

吹き飛んだ俺は背中から無様に転がった。宙に舞うサヤちゃんが見えて、その落下地点は　俺。

「いよつと」

頭の横についた手を支点にし、後ろ周りの要領で、膝を畳んだ身を腕力だけで弾き飛ばす　後ろ周り跳び。

どんっ！

サヤちゃん……俺が倒れたままだったら男として不能になってたよ。

「さつきから、どうして手を出さないんですか？」

着地体勢からすっと立ち上がり、サヤちゃんが睨み付ける。新体操選手よろしく10点満点の着地ポーズの俺は、挙げていた両手を下ろしつつ、

「だって、女の子を痛めつけても嬉しくないの」

と肩をすくめた。

「それに、素手で、つてのも慣れてないんだよ。さつきの当て身だって、防ぐのでいいっばいっばい」

しかもとっさの防御だったもんだから、まだ腕が痺れてたり。

「奇遇ですね。私も素手は苦手なんです」

ウソつけ、サヤちゃん。

「そろそろ背中にあるものを出したっていい頃ですよ、キアさん」

不敵な笑顔が妙に良く似合う。粉雪も相まって、幻想的にすら映る。

「知^ちつて^てる^んだ[？]」

「キアさんほどの人が、丸腰でうろついてるなんて考えられませんから」
ほんと、不適スマイルが良く似合う。

「そっか。そかそか、うんうん」

「？」

1人何度も頷いている俺に、サヤちゃん是不審いっばいの顔。

「んじゃ」

「おいおい」

くるりと背を向けたところ、すかさず突っ込まれた。

「どこ行くんですか」

「逃げようと思って」

首だけ振り向いて応える。サヤちゃんの目が大きく開いていた。

「はい？」

「俺、丸腰なの」

言うつが早いか、ダッシュした。

「で、今まで走り続けてたって？」

俺の行き付けの喫茶店『ムム』。テーブルにコーヒークップを置いてくれたエリヤ「マルソーは、笑いを噛み殺しながら向かいのイスを弾いて腰掛けた。

「ずいぶん執心振りじゃないか」

「だからって、朝まで追いかける事ないでしょー」

カップに角砂糖を1つ、2つ落とす。波打つコーヒー。

「笑い事じゃないよ」

3つ、4つ。

「……砂糖、入れすぎだろ」

「ん？ そう？」

スプーンで掻き混ぜてからすする。ちょうどいい甘さ。

「女に追いかけられるなんて、男冥利に尽きるじゃないか」

「時と場合によるって」

肩を震わせてまで笑いを湛えるエリヤが憎らしい。

「しかし、4時間近くも走り続けるなんて、体力ある女だな」

「驚きだよ。なかなか諦めてくれないし」

あの後 サヤちゃんに背を向けて敵前逃亡を図ったのだけど、サヤちゃんは全力で追い駆けて来たのだった。「待てやこらァ！」などと穏やかでない暴言を振り回しながら。街中を走りに走って、撒いたと思えば前から現れ、振り切ったと思えば上から現れ、右へ左へ縦横無尽、道路から屋根へ、屋根から道路へ、街中を立体的に逃げ続けた。

「エリヤって、ここで働いてたりするんだね、そーいや」

ハーフエブロン姿のエリヤを眺めてみる。するとエリヤは不満そうに、

「手伝いだ」

「時給いくら？」

尋ねると、やれやれ、と両手を挙げ首を振った。

「日給200」

「安いねー」

「いわく、小遣いだと」

エリヤが親指で示したのは、カウンターに囲まれるように設えられたキッチンで、鍋のスープを優雅に掻き混ぜるルコ姉の後ろ姿。『Any』の主人であり、看板女将でもあるルコ姉は鼻歌交えて本日もご機嫌なり。

「0よりマシでしょう？」

エリヤの声をすっかり捉えていたらしい。振り向いた笑顔は本日も美人なり。

「その フィルなんたら教会？」

エリヤの口が開く。

「フィルデナント教会」

「それぞれ」

取り出したタバコの先をクルクル回しながら、怪訝そうに眉をひそめた。

「教会だろ？ キアに何の用があるんだ？」

「教会つてのは表向きなんだよ、あそこは」

「表向き？」

エリヤのこの反応を見る限り、フィルデナント教会の事はまったく知らないらしい。

ま、エリヤは俺とは異なる世界を選んだのだから、知らないのも当然だった。

「マフィアみたいなもん」

「教会なの？」

「教会だからこそ、って言うべきかな。そもそも、ここら辺のマフィアって教会が廃退してつた末に出来上がったみたいなものだし。知らない人は知らないだらーけど」

「へえ」

吐いた煙を見上げるエリヤには、さしたる興味ももたらさない。案の定、現状の疑問に話を進めた。

「マフィアがキアに何の用だ？」

と、改めて聞いてから、はたと思い至ったようで、わずかに声を潜める。

「仕事か？」

店内には、さっきまで席を埋めていた客がごっそり帰ったせいで　それこそ、俺にはわからない合図でもあったかのように　スカンスカンのスペースだけ。わざわざ声を潜めずとも、聞かれて困る相手はいないし、仕事っていう単語ならもっと堂々と出すべきだ。潜めて吐き出されると逆に不審。

そこまで考えたけど、言及はしない。

「違うと思うよー。力づくでも連れてこーとする理由がないでしょ」

大口あくびをかました俺は、背にした窓を振り返る。おー、天気予報の言ってた通り、大粒の雪がひらひら、ひらひらと舞っている。寒さが大の苦手な俺にとって、とても帰りづらい状況。想像するだけで手がかじかむ。

「じゃ、恨み買ったんじゃないか？」

「あゝ、その線は濃厚だよな」

ひらひら舞う雪　すでに石畳を覆い尽くした後は白く積もり、街を白く白く彩っていくであろう雪を、恨めしげに見上げた。

雪は嫌い。嫌な事を思い出す。

「濃厚って……軽く言うなよ。相手はマフィアだろ？」

「ん〜？」

視線をエリヤに戻すと、呆れと怒りの真ん中みたいな顔をしていた。

「だって仕方ないよ。俺はいつだって、恨み恨まれたその間にいるんだから。いつ、どう死んだって不思議じゃないんだ」

「キア」

エリヤの顔が憤怒を強くする。

「たとえジョークだとしても、そいつは笑えねえよ」

「……………」

ずずつと、コーヒーをひと口。瞬きひとつせずに俺を見つめるエリヤの、色違いの瞳。深緑の右目、青みがかった黒の左目。その指に挟んだタバコの灰が、床にポトリと落ちて砕ける。

「勝手に死んでみる。おまえの葬式なんかやんねえからな」

静かな怒号。心の底から、相手にしたくない唯一の相手。

「……………」

俺と、こうして向かい合ってくれる事に。

俺を、そんな目で見てくれる事に。

「ありがとう」

「どうして礼なんか言うんだ？」

「なんとなく」

エリヤの呆れている顔が、俺は好きだったりする。それから、と彼の肩越しにカウンターの指し示して、

「俺に何の用があるのかなんて、本人に聞いた方が早いよ」

「……ま、そりゃそうだが」

齒切れの悪さがそのままエリヤの躊躇を物語る。タバコを灰皿で押し潰して、仕方なさそうに振り向いた。俺とエリヤの視線の先　カウンターの真ん中の席。一心不乱にスパゲッティに食らい付いているサヤちゃんの後ろ姿があった。

「……なあ」

エリヤが、俺の振り向きもせずに嘆息。

「どうしてマフィアの使いがAnyでメシ食ってんだ？」

「お腹空いたんだって」

「そうじゃなくてよ」

「じゃ、何？」

「どうして、キアと一緒にぶっに来たんだ？　敵対者だろ？」

「あーっと……」

4時間、街を全力で逃げて追い駆けて、さすがの俺も疲れてしまった。サヤちゃんの持久力もかなり尋常ではなかったけども、長時間の追走に確実に体力は削れたようで、もう数えるのも億劫になるくらいの数十度め、俺に追いついた時、

「っ、い、1回……（唾を飲む）…休憩し、ませんっ…か……？」

肩で息をしながら、提案したのはサヤちゃん。

「じ、じゃあ…（大きく深呼吸）…近くにいい店……があるから…そこで……」

俺も俺で心臓が激しく打っていた。

氣息奄々の体で向かい合う2人を、犬の散歩中のおばちゃんが奇異な視線でチラチラ見ていた。

おばちゃんなんかどうでもよくて　こうして俺とサヤちゃんは、2人そろって

Anyに入店したのだった。

「……利害の一致、かな」

思い切り端折った返答だったのだけど、エリヤはふうんと鼻を鳴らした。エリヤにとって、本当の意味での興味はそこにないようだった。サヤちゃんを凝視するエリヤさて、何を考えてるのやら。

「ルコさん。おいしい食事をありがとうございました」

皿をキレイに平らげたサヤちゃんは、次いで差し出されたスープをすすろうとして、
「あちっ」

「そんな慌てて飲む事ないのよ。ゆっくりしてって」

ルコ姉の慈愛に満ちた声音を前に、湯気の立つマグカップに息を吹きかける。

「ルコさんってこんなに美人なのに、こんなおいしい食事まで作れるなんて羨ましいです」

「ありがとう。そう言ってもらえて嬉しいわ」

「天つて、二物を与えるもんなんですネ」

サヤちゃんの大絶賛に、エリヤが嫌味っぽく笑った。その理由を知らない俺は、それを聞く事もせずに、2人の様子を眺め続ける。

「サヤさんだつて、料理できるんじゃない？」

「それが全然ダメなんですよ」

「私だつて、最初はまったくダメだったのよ。好きこそ物の上手なれの典型」

「それで店を出してるんだから、ルコさんは料理の才があつたんですよ。私はてんでダメです。どんなに頑張つてみても、インスタントの方がおいしいんですから」

大げさに肩を落としてため息をつくサヤちゃん。果たしてどれ程の料理をしてくれるのか、少し気になった。

「ルコさんの恋人が羨ましいです。こんなおいしいスープを飲めるんだから」

スープをすすったサヤちゃんは、ほうつと言葉を漏らす。それには俺も同感。ルコ姉の恋人は、さぞ食に困らないだろうね。

「私、恋人いないのよ」

鍋を煮込んでいた火を止めて、ルコ姉は意外にもあつさりといいのけた。意外にも、一見それとわからないほどの微々たる悲哀をその微笑に乘せて。

「本当ですか？ ルコさんだつたら、男に不自由しないと思うのに」

哀しい表情なんて見た事がなかった。初対面であるサヤちゃんには、気付けないほどのわずかな変化。俺はエリヤに視線を投げたけど、天然パーマの後頭部は微動だにしない。

「世の中ってそれほど、うまくはできてないみたい。殊更、男と女の仲ってものは」
ルコ姉の言葉は説得力で重かった。キッチンから出てサヤちゃんのとなりに腰掛けると、

「だから、今に一生懸命にならなきゃね」

サヤちゃんの肩に手を乗せて俺をチラ見。

って、あれ？

「キアくんを大切にしておいてね」

サヤちゃんがマグカップを取り落としそうになった。

「そういう仲なわけだ？」

エリヤ。真顔で聞かないで。

「ちっ違います！」

心外極まれりと声を荒げるサヤちゃんを、ルコ姉はきょとんと見つめた。次いで俺を見て、

「付き合ってるんじゃないの？」

違います。

「だって、朝帰りでしょ？」

とんでもございません。

「とんでもないです！」

ひと際荒げられるサヤちゃんの声。ぶんぶんと、千切れるんじゃないかと心配してしまうほど、顔と手を振って否定を強調する。

「あの人は清い仲です！」

否定するポイントが違った。

「あら、私ったら」

おもむろに赤面したルコ姉は照れ笑いを浮かべる。

「すっかり済んでるものだど勘違いしちゃったわ。先走って恥ずかしい」

「わかっていただけて嬉しいです」

安心するには早いよ、サヤちゃん。誤解されたままだよ。

キッチンの戸棚の上に掛けられた時計を、ルコ姉は見上げ、

「あら、こんな時間」

あと5分ほどで8時になるのを見て、いそいそとハーフエプロンを外した。

「エリヤ。洗濯してきちゃうから、ちょっと店番をお願いね」

「俺に任せて平気か？」

「平気よ。この天気だし、きっとお客さんは来ないわ」

軽く手を上げた承を示したエリヤを見届けて、店の奥にある階段へとルコ姉は駆けて行く。パタパタと軽快な、階段を上る足音。

「とても綺麗な方ですね」

その背中が2階へ消えた後も名残惜しそうに、サヤちゃんは階段を見つめていた。惚けているようにも見えた。

「恋人がいないなんて不思議です」

応えたのはエリヤだった。

「ルコ自身の問題があるんだ、仕方ない」

ルコ姉の問題 はて、何だろう？

「完璧じゃないですか。料理もできるし性格もいいし、何より美人です」

サヤちゃんの中では、どうやら『美人』の配点は高いらしい。

「エリヤさんだって、一緒に働いてて思いませんか？ あんな綺麗な人といられるなんて、私は羨ましいです」

「何も感じないね」

「そんな男じゃありません」

肩をすくめたエリヤへ、ずいぶんと一方的な断定。睨むサヤちゃんは殺意すら感じさせた。サヤちゃん、ルコ姉にご執心。

「何とでも。 ところで、かなりの興味をキアに持ってるみたいだな」

語調をそのままに、エリヤは話題だけを変えた。

「恋人なんかじゃありません」

「キアに何の用だ？」

シリアスなエリヤに突っ込みは期待できないよ、サヤちゃん。

「エリヤさんには無関係です」

突っ込まれなかったせいか、ふてくされながらもエリヤに振り向く。

「私が用のある人はキアさんだけです」

「マフィアがキアに何の用だ？」

問い質すエリヤの口調は容赦なかった。敵意丸出しで睨み付ける。

「言っておきますけど」

サヤちゃんはマグカップを手にとると、手首だけで器用にカップを回しながら言い切った。

「私はフィルデナント教会の人間ではないんです。オーナーが会いたって言うて、キアさんを連れて来るように依頼されただけですから」

なるほど。そういう意味での『使い』だったわけだ。

「エリヤさんには、無関係な話なんです」

もう一度言う。今度こそ反論を許さない、反論を拒絶する物言いだ。

「だったら」

だがエリヤは、時にこの俺が呆れてしまうほどに、決して物怖じしない性格の持ち主であるのだった。

「使いであるお前じゃなくて、オーナー本人が来ればいいじゃないか」

「やたらと絡むんですね」

エリヤから俺へと移したサヤちゃんの視線は、窓の外へ行き着いた。マグカップを唇に付け、音を立てずにスープをすする。

「大事な友人だからな」

「そんなに想ってくれてたのね、エリヤっ」

「……………」

裏声で言ったら睨まれた。

「……………」

サヤちゃんはドン引き。

「空気を和ませようと、かわい子ぶってみました」

「いらん事すんな」

エリヤってば、なんて冷たい。

「依頼されたって言ったな。じゃ、おまえは何者なんだ？」

エリヤはすぐに切り替えて、まだ引き気味のサヤちゃんに問うた。昨晚の身のこなしが想起　俺を吹き飛ばし、あまつさえ朝まで追い駆け続けるなんて、並大抵の女じゃないのは確実。

「ただの小市民です」

「たいそうアグレッシヴな小市民だ。」

「バイト代稼ぎにマフィアを使うってのか」

「皮肉もいいけど、エリヤ。そこは突っ込もう。激しく突っ込もう。」

「多少、マフィアとのつながりのある小市民です」

「サヤちゃん……………どうしてそれも小市民にこだわるか。」

「埒が明かないな」

ため息ついて、エリヤは両手を上げた。

「キア。お前が聞けば答えてくれるんじゃないか？　あの女にとって、キアは関係者なんだから」

「そうだねー」

「……………何してんだ」

「鼻と唇の間にタバコ挟んでんの」

「返せ」

俺から奪ったタバコをくわえ、とっとと聞け、とエリヤの目が促す。聞け、と言われても。

「俺、フィルデナント教会とは面識ないはずなんだけどなー」

「そんなはずないです」

火を付けて主流煙を吸い込むエリヤ越しに、その眉を上げて、サヤちゃんはたやすく否定してくれた。

「オーナーは、キアさんの事をよく知ってる風でしたよ？　なんでも、以前は相当仲が良かったとか」

知らないどころか憶えがない。

「オーナーの名前、教えてもらってもいいかな？」

思えば、この時に名前を聞くべきじゃなかった。そうすれば、ストーリーはもっと違う終着点に向かっていただろうし、あんな胸クソ悪い思いもなくて済んだ。けどこの時の俺は、オーナーと面識がないって信じ切っていたし、だからこそ無防備にも、何気なく、信じ切ったまま、聞いたのだった。

「ビリー＝マクライニです」

知ってるどころか忘れられない名だった。

「知ってる名前なのか？」

「知らない」

「ウソつけ。お前はわかりやすいんだ、ウソつくだけ無駄なんだよ」

とぼけるのが得意な人間は、とぼける人を看破する目もまた、長けているようだ。

「ウソをつくと目が泳ぐからな。すぐにわかる」

俺がヘタなだけだった。

「その、ビリーってヤツは？」

「地下塔にいた時の友達」

地下塔　その単語を口にしたのはどのくらいぶり？　きっと、シスターと対峙した時以来だから、1年ぶり？……そんなに久し振りじゃない気はするけども、頻繁には出ない単語であるのは間違いない。エリヤにしてみれば、今やその単語とは無縁の世界に身を置いているのだから、俺以上に久しぶりな響きのはず。そしてそれは、心地良い郷愁なんかよりも何光年と離れているらしく、

「そいつはまた……関わりたくないな」

エリヤの表情は渋く歪んだのだった。

「お2人とも、地下塔出身なんですか？」

割り込んだサヤちゃんは、能天気聞いて来る。

「サヤちゃんも？」

尋ねたところ、首を小刻みにふるふると振って、

「少し知ってるくらいです。出身でもなければ育ってもいません」

小市民レベルじゃ聞く事すらないぞ。

スープをすするサヤちゃん 何者か知らない人物。みすてり〜。

そして、それ以上に はるかに凌ぐ、厄介な人物 ビリー＝マクライニ。

「エリヤ」

「何だ？」

「アレ、受け取っていい？」

そっぽ向いてタバコを吸い、煙を吐いて、

「部屋にある。勝手に持ってけ」

さっき言った事、忘れんなよ？ エリヤの横目が言っていた。

しんしんと降る雪は、ちっとも止む気配を見せない。大粒に変わってから、一定の量を絶えず地面に積もらせる。吐く息は白く広がった。

あー、寒い。

寒いのが苦手な俺としては、こんな日はベッドでぬくぬくしてる方が好き。雪がひらひら降っている中、すべての音を雪が吸い込んでしまう静寂を歩くなんて、そんな俺自身が信じられない。北極圏に程近いこの地方に、このクソ寒い季節にいる事そのものがすでに信じられないけども。

寒い。寒い寒い寒い寒い。

寒い。

「さつみー」

「さつきからそれしか言っていないじゃないですか」

2メートルほど間隔を持って先導してくれてるサヤちゃんが、苛立たしげに俺を振り向いた。

「だって寒いんだから仕方ないじゃない」

「だからって連呼しないで下さい。気が滅入ります」

物事をスパッと言い切ってくれる。

「あとどんくらい？」

「もう少しです」

「もう少しもう少して、聞くの4回目だよ」

「キアさんが聞いてくる回数が多いんですよ。もう少しだから辛抱して下さい」
「5回目」

呟くと、気持ち、サヤちゃんの足が速まった。俺は震えるため息を漏らして、周囲を見回す。左右を林に挟まれた車道はすでに雪が足元を埋めて、車なんて走れたものじゃない。左手の林の向こうに、大きな湖が見えた。どんなに寒くても決して凍結しないというリア湖。

「あの湖、リア湖って名前ですよ」

俺の思考を読んだかのようなタイミングで、サヤちゃんが声を発する。

「昔、冬になると凍結しちゃう湖だったんだって。それに困った村人が神様に、人身御供として村娘を嫁がせて　その村娘の名前がリアっていうんだけど、それから凍結しないようになったんだ」

「同じ名前を持つ人を知ってます」

語った昔話、完璧にスルー。

「へー。その人、美人？」

「すごい美人です」

「へー。今度紹介してよ」

「よく銃を振り回してます」

「……たくましい美人だね」

振り返りもせずに俺の前を進むサヤちゃん。どうしてリア湖の話なんかしたんだか、背中から読み取れるような術を、俺は持っていない。そんな便利な術を持っている人も、俺は知らない。

だから聞く。

「どうしてそんな話を？」

「何となくです」

返答はわかりやすく明快で爽快。

「きっと、彼女とは会わないでしょうけど、それでも会ったりしてしまった時、私は何を言って、彼女に何を言われるのか、少しだけ楽しみだったりするんです」

「……何の話？」

「彼女、私の事が苦手だったみたいです。元より、人とのコミュニケーションが苦手

みたいですけど。そんな彼女が嫌そうな顔をするのが、私は好きだったんです。猫を見ると、ついからかいたくなりませんか？ あれと同じで、つい巻き込みたくなるんです。あからさまに迷惑がつている彼女の顔が見たくて」

不思議なコなんだなー。踏みしめる雪をBGMに話すサヤちゃんの言葉は、雪の静けさのために輪郭がはつきりと響く。語調は懐かしんでいるようで淡泊、身振りもなければ歩調に躊躇もない。

「独り言です」

それはまさに独り言。伝えるものでもないし、語るものでもない。

伝えるためのものじゃなく、語られるためのものじゃなく。

伝えるべきものじゃなく、語るべきものじゃなく。

さながら泡のように、ポコツと生まれて弾けるだけ。後には何も残らない。

サヤちゃんの、静かな音吐。

俺の過去。

「独り言、か」

口の中だけで呟いた。サヤちゃんの耳に届いたかどうかはわからないけど、不意にその足は止まった。

「着きました」

サヤちゃんがむいた左手　そこだけ林が開けていて、屋根に十字架を掲げた教会が、ひっそりと佇んでいた。それはそれはシンプルな教会。三角屋根が1つの、見てくれはこじんまりとした建造物。街から北上した、こんな辺鄙な場所に置くなんてさぞかし交通が不便なんじゃ？　見たところ車も置かれていないし。となると、ここで生活してるのかい。

今日のマフィアは、結構健気に生きてるもんだ。

サヤちゃんの後ろに付いて行くまま入った教会は、空気がすっかり温まっていたおかげで、寒さに強張っていた体をじんわりとほぐしてくれた。ノックもせずにサヤちゃんが開けた両開きのドア、そして堂内の左右の壁、その高い位置にある二対の窓はそれぞれが二重構造になっていて、防寒対策は完璧。長イスが横に2列、縦に5列並びその先に、抱えられるほどの大きさの十字架を乗せた教壇がある。磔刑のステンドグラスにオルガンと、教会以外の何物にも見紛いような内装が、マフィアとのつながりなんて発想から突き放す。

けど、ここはマフィアなんだよね。

唯一。そこだけは空気が違った。

「ひゃっは！」

俺の顔を見るなり、耳障りな哄笑に口を開けた男。場違い甚だしい白スーツに白いネクタイ、黒いシャツ　ホストですか？

右最前列の長イスに寝転がっていたらしいホストは、起こした上体をひねり背もたれに腕を乗せて、

「久し振りだなあ、兄弟」

病的なまでに細面、吊り上がる切れ長な瞳を細くした。

「何年ぶりだい？　１０年近く前か？　ひやははっ！」

相変わらず、無意味に笑う男だった。見事な色のブロンズも、嫌味っぽく歪む唇すらも、何もかもが相変わらず。

ビリー＝マクライニ。

「まさかビルが、聖フィルデナント教会にいるなんて思わなかったよ」

「立ったまんまつても疲れるだろ？　座れよ。イスはたくさんある」

促されたけど、俺は肩をすくめて断った。横目でサヤちゃんの様子を窺うとパチッ。

爪を切っていた。

「……サヤちゃん？」

たまらず声をかけた。

「はい？」

隅っこに身を寄せ、うずくまって、左手の爪を切るサヤちゃん。

「何してんの？」

「爪切りですけど？」

うん、それは一目瞭然だ。

「どうして、今なの？」

「ちよつと気になったもんで。爪の長さは均等じゃないと気になるんです」

そう言うと、再び爪切りに専念する。右手で構えた爪切りと、左手を睨み付ける双眸。

パチッ。

慎重に爪切りをしてるサヤちゃんは、いいや、放っところ。

「ひやははは！　そいつ、おもしろいだろ？　先代のオーナーがよく使っていた女なんだ。仕事は早いし確実。現に、今こうしてお前を連れてきたしな」

その間に、４時間弱の鬼ごっこがあったとは、ビルも思っただろけど。

左手を眺め首を傾げるサヤちゃんからビルへと視線を戻すと、彼はその瘦躯で立ち上がっていた。

「そう言えば」

俺の中で、1つの仮定が組み上がった。

「聖フィルデナント教会のオーナーが死んだって聞いたよ。体をバラバラに刻まれて、木に磔にされてたつて」

ビルは笑っていた。目を細め、唇を歪めて。

「まるで、オヤジと同じ殺され方だね」

俺は無表情にビルを見つめる。

「聖フィルデナントのオーナーなんだって？ 先代が死んでくれたおかげで、ビルは成り上がったわけだ？」

「そのおかげで、今や多忙だけどなあ。俺がオーナーだつてのがそんなに気にくわねえのか、いつ寝首をかけられるかわかったもんじゃない。不眠症になりそうだしっ！」

「そんなに大きくはないマフィアとは言え、それでも大将になったんだ。ビルも偉くなったもんだよ」

「フィルデナントの規模は、これから大きくしていくさ」

イスに置いていたらしい、ビルはそれを手にすると一息で鞘から抜いた。

「その前に、どうしても片しときたい仕事があるのさ」

一振りの刀が空を薙ぐ。小気味良い音。

「ひとつだけ、聞いてもいいかい？」

俺は人差し指を立て、ビルに示した。

「どうして先代オーナーを、オヤジと同じように殺した？」

オヤジ といっても、父親と言うわけじゃなくて、育ててくれたって点ではそうなのだけど、いわば師匠だった。俺とビルを育て、生きる術を教えてくれた人物。地下塔において、心を許す事のできた数少ない人。聖フィルデナント教会先代オーナーと同様に、体を刻まれ殺された男。

「どうして、だつて？ ひゃあっは！」

刀と鞘を持ったまま両手を広げる。さも当然とビルは言っただけ。

「俺からキアへのメッセージさ。お前がどんな仕事しているかってのは知ってたんだがよあ、こっちから接触しにくかったからなあ。オーナーの死につぶりを見りゃわかるだろって思ったんだが」

ちっ　　ビルの舌打ちは、妙に湿っているのだった。

「気付かなかったみたいだな、キア」

「ビルと聖フィルデナント教会と、俺の中ではつながってなかったんだ。そんな符合なんて気付かないよ。世の中、似たような事するヤツもいるもんだ、って思ったくらい」

「ひやはははは！　おまえらしいなあ！　オヤジの死つてのは、所詮その程度だったって事か！」

ビルの哄笑は、懐かしさも覚えなくらいに耳障りだった。

俺はコートを脱ぎ捨て　　背中に背負っていたそいつを握り　　ゆっくりと引き上げた。金属同士が擦れる音に鼓膜が震える。

「　　いつ見ても、そいつは綺麗だな」

「俺も、そう思う」

俺が抜いたそいつは、刀と呼ぶにはシンプルすぎる代物。握り部分から刀身まで、すべて金属でできた刀。部署の名称など意味を持たない、一枚鉄の剣。しっかりと握られるように指の形にくぼんだ握りから、わずかに反ってスウッと伸びる刀身は片刃。地価塔でのみ造られる金属なのだと、オヤジは言っていた。錆知らずの折れ知らず。まるで不屈の信念を具現したような刀だと。

「さて　　」

重心を沈め、ビルが構える。

「　　殺し合おうか」

真上に放られた鞘を一瞥し　　俺も構えた。

「めんどくさ」

ビルの唇が、ニタアと左右に伸びた。

オヤジは肌の浅黒い、豪快に笑う男だった。筋骨隆々とした体躯の持ち主で、巨体でありながら俊敏で、その明るい性格から周囲の人望は厚かった。

50歳手前だというのに、20歳だと言い張っていた。

くだらないジョークを飛ばしては、1人笑っていた。

それでも、剣技には長けていた。

オヤジが教えてくれたのは、地下塔に置ける生き方　　弱者に回らない処世術。

俺やビルが育った地下塔は、奪うか奪われるかの世界で、まるでそれが根本であるかのように絶対で混沌だった。オヤジに拾われるまで弱者でしかなかった俺は、運が

良かったんだ。

「生きたいか？」

血の海、死体の岩礁　難破した俺に手を差し伸べた時以来、親父の真剣な顔なんて見た事がない。

そう言えば、オヤジが言っていた。

「こいつだ！　って思えるヤツが現れたら、俺はこの剣をそいつに譲るつもりだ。ただ譲るだけじゃつまんねーな。ちよつとした試験をやつて、そいつがクリアしたら、その時には譲ろう」

試験。

「内容は教えらんねーなあ！」

知りたかったら、俺を震わせろ　そんなの無理に決まってるだろ。

そして殺された。

殺され尽くした。

きっと、殺され飽きるくらいに。

ガキッ！

鉄と鉄のぶつかり合う音、そして火花。振り下ろされたビルの切っ先を紙一重でよけ、振り上げた俺の切っ先が空を切る。そして火花、火花。堂内に響く鉄の衝突音が、次いだ衝突音に切り裂かれる。徐々に体内を満たしていく高揚感も、うなじの産毛をチリチリと灼く緊張感も、久方振りの心地良さだった。

ガキッ！

もう何度目かなんて数えていない　火花。刀で刀を押し合うツバ迫り合い。呼吸が感じられるほどに近いビルの顔は　嗤っていた。

「腕、鈍ったんじゃないか？」

「ビルの方こそ」

「言ってくれるねえ」

言うが早いか、ビルの足が蹴り上がる。予想できた攻め方　後ろへ飛び距離を取る。次の攻撃に身構え　だけど、ビルは飛び込んで来なかった。

「キア」

刀を肩に乗せながら、

「お前、1人で動いてるんだってな」

人を見下すように笑う。この笑いが嫌いだった。

「その間に、ビルはトップに上り詰めた。自慢話でもするつもり？」

「武勇伝でも聞かせてやろうって事さ」

「せっかくだけど」

丁重に断ろうとしても、ビルは聞かなかった。

「最初は、先代オーナーのボディーガードだったんだ」

「その話、長いの？」

長い話なんて、エリヤだけで十分だ。

「キアは集団行動を嫌ってる」

俺の言葉なんて初めからなかったかの如く。

「けどな、キア。集団行動もいいもんだ。1つの仕事でも、分割すりゃ負担が軽くなるって道理くらいわかるだろ？ しかも、マフィアでの集団行動だ。これがまた、なかなかおもしろい。構成員の全員が全員、欲深いヤツらばかりなんだ。搾取したくてたまらんヤツらばかりなんだよ。そんなヤツらだけで集団行動するんだ、楽しくないか？」

ちっとも楽しくないです 俺は肩をすくめて首を傾げた。ビルが嘲笑う。

「集団行動が嫌いなヤツだ、わからねえか」

「そういう事」

「気に食わねえな」

言を吐くと同時にビルは地を蹴った。咄嗟に身構え、刀を振り上げる。

ガキンッ！

右上から振り下ろされた凶撃を弾いて一気に肉薄。みぞおち目掛けて膝を突き出すも、ビルは飛び退ってかわした。

「ひいつやつは！」

笑うように掛け声を放ち、ビルの刀が薙ぐ。すんでのところで重心を落とした俺の頭上で空を切る音。

「もいつちよ！」

振り切った手を返して繰り出された下段の薙ぎをバック転でよける。

「ちょこまかしてんじゃねえよおおおお！」

だんっ！ 大きく踏み込んだビルが、さらに刀を振り上げ ！ なんて器用な

ヤツ！ 切っ先が過ぎたのは鼻先！ …………… おー、間一髪。

「キアああ！」

さらにさらに踏み込んで振り下ろされた一撃を、刀で受け止めた。

「気に食わねえんだよ」

刀で刀を押し合って拮抗する中、ビルが言う。

「いつだって飄々としてやがる。余裕ぶった顔、なめきった態度。おまえはいつだってそうだ」

瞬きもせずに見開いた瞳。乾いた唇が歪む。

「俺と同じ、人殺しだろうが」

俺の心は、波打ちやしなかった。

「一市民として生活してんだってな。殺しやつといて、何も知らんって顔で生活してんだってな」

刀を押し力が強くなる。

「今まで、何人殺してきた？」

そうなんだよ、エリヤ。

俺は、何人どころか何十人も殺してるんだ。

だからね、エリヤ。

あの時言った言葉は本音なんだよ。

それでも、そんな俺を友人と呼んでくれる。

うれしいんだよ。感謝してる。

こんな俺を。

こんな俺でも。

こんな俺なのに。

「　　ねえ、ビル」

「あん？」

「どうしてビルは、こんなにまで俺に殺気を向けるの？」

「お前に向けないで誰に向けんだよ」

押し殺し絞った声音　　ビルの刀が重くなった。

やばっ。

束を握る両手が汗ばむ。限界感　　渾身の力を込め、ビルの刀を押し弾い

絶妙のタイミングで。軽くなる刀。

ビルの笑み。次いで哄笑。

押し弾く対象を失った俺の体は前のめりにバランスを崩す。

無防備な俺を眺めているほど、ビルは馬鹿じゃない。すばやく俺の左脇に身を滑らせ一閃。

ヒュッ！　　刀身がうなる。下から上へ　　刀が煌めき、紅潮したビルが嗤う。

「何故」

「どうして」

俺とビルの声は重なった。

「オヤジを殺した？」

「俺がやったって？」

質問して、すぐさま返答なんて得られない事を知ってるビルは、俺の口が開くのを待っているほど馬鹿でもなかった。おまけに気長でもなかった。

「あの日　俺とキアがオヤジの死体を見つけた、その前日　オヤジは誰かと会っていた。それがおまえだったってわかったのは、地下塔から出て数年後の事だ。どうやって知ったかなんて、野暮ってえ事聞くなよ？　情報が財産だと豪語するヤツはキアも知ってるはずだ」

「ジョーイだね」

敬愛して止まないクラシック音楽から付けた名なのだと言っていたけど……はて、どの曲だったっけ？　ジョーイとも、しばらく会ってないな！。

「どうして殺したんだ？」

ジョーイの事なんてどうでもいいとばかりに、ビルは俺を睨み付けた。ああ、憐れなるはジョーイ。

「あれだけ立派な人を、どうして殺める必要があった？」

「その立派な人に育てられたってのに、ここにいるん人の成れの果てを見たら、さぞ悲しむだろうね」

ビルの神経を逆撫でたつもりはなかったんだけど、

ヒュウンッ！

事実は、左頬に傷を増やした。

「ふざけてやってんじゃねえんだよ、キア。おまえがオヤジを殺したって事に、俺の腹は煮え繰り返ってんだ」

「それを聞いてどーすんの？」

「冥土に行く前に懺悔させてやろうって言ってんだ」

「教会に呼ぶってのも、洒落が利いてるね」

「友人の情けだ、祈ってやるよ」

「……残念だし、惜しい事だけど」

俺の中で、それは固まった。揺るぎなく固く、消え難いまでに堅く。

「神なんてクソ食らえだ。懺悔する気も冥土に行く気も、さらさらないね」

「強情だな」

「取り柄だよ」

俺は地を蹴った。殺意でもって刀を振るう。守り一辺倒だった今まで　攻め込むこれから。ビルの殺意がオヤジの死に端を発するものと明白になった今、俺に躊躇など微塵もない。ビルの太刀に迷いなどないし、ならばこちらも本気にならなければ失礼というもの。ヘタに手加減などしたら、ビルの怒りを相乗するだけだし。

「ひやはっ！　やっと本気モードか！」

ビルがかわした切っ先が、イスの背もたれをチーズみたいにスライスした。

「しかしまだまだだな！」

哄笑を撒き散らし正確な太刀筋を放つビルは、さながら狂気。

刀を弾き弾かれかわされかわし、攻防の境界が曖昧に溶け始める快感。全身の筋肉が躍動する。全身の血液が沸騰する。全神経がビルに集中した。その刀に集中した。次の攻撃を俊敏に察知して防御から攻撃にシフト。

オヤジに育成され鍛え洗練された反射神経がぶつかり合う。鋼がぶつかり弾き合った刹那をかいくぐって、ビルの身が弓なりに仰け反った。

「両断んんん！！」

後方へ振りかぶった刀を　一気に振り下ろす！

肉薄していた俺はかわす暇なく、己が刀で受け止める他なかった。

ガキイイッ！

ビルの全力＋体重を乗せた刀は殺人的に重かった。眼間で受けた刀が軋む。膝が沈む。脆くも体勢は崩れた。

「殺ったあ！」

ビルの足が顔面に迫る　！　背筋が冷え背骨を悪寒が駆け上った。歯が折れ鼻が曲がってぐしゃぐしゃな顔が脳裏をよぎって

そんなの絶対やだ。

そう考える間もなく無理矢理跳び退る。

脇腹が痛んだ。膝がみしり。上体をひねるように後方へ跳ぶ。

「まだまだああ！」

前回りで転がり体勢を取り戻し　振り返ると、イスを使い二段跳びで宙に舞ったビルが身を仰け反らせていた。全身をエビ反りに、頭の後ろへ振りかぶった刀が振り下ろされる　！

第2弾。

「両断っ！」

「されてたまるかつ！」

きびすを返すや俺はダッシュで逃げた。

ブウォンッ！

凄まじいまでに空を断つ轟音。あんな一撃、もう受けたくない。

全力と体重の相乗の一閃を放ったというのに、着地したビルは体勢を崩しやしなかった。地面に刀を突き立てるようなヘマも、たたらを踏むような醜態も見せずに直立不動。一体どんな脚力をしてるんだか。

「一歩間違えれば隙だらけなのに、絶妙なタイミングで出すんだもんー、その技」

感心8割。俺はビルと向き直った。

「当たんなきや意味ねえよ。やったと思ったのによ」

頭を掻きながら、ビルは無然とうめいた。

「さすがはキアだ、一筋縄にはいかねえのな」

「大人しく殺されると思ってた？」

「そうは考えてねえが。予想以上にてこずる仕事だ、こりゃ」

「俺を殺すのが仕事扱いかい」

「ひやは！ 言ったる？ 片しときたい仕事があるってよ」

「あー。言っただよーな、言ってないよーな」

「言ったださ」

ビルが構えた。体中から殺氣がにじみ出る。そろそろ終わりにしたいのは俺も同じだった。こんな面倒臭いチャンバラよりも、惰眠を貪り続ける方が数十倍も気が楽だ。

鬼ごっここのせいで昨晚から一睡もしてないのだし……あれ？ いつのまにかサヤちゃんがない。

まいつかー。

ヒュンッヒュンッ 刀を〰回素振りする。オツケ、問題ない。ビルの攻撃を受け止めた時の痺れは消えていた。相変わらず腹は痛いけど。思いの他、傷は深いのかもしれない。

「次で終わりにしようじゃないか、キア」

「そろそろ、本気で眠くなってきたしね」

「だったら、今すぐにでも眠っちまえ」

大きく踏み込んだビルは、一気に距離を縮めた。同時に放たれた突きを左によける。

くんっ 空で止めた切っ先が回った。

「っらあ！」

首を狙った一閃が横に伸びる。腰から沈んだ俺は 頭のすぐ上をかすめる刀踏み込みながらの下段で応戦。跳び退いたビルをさらに攻め込む。息つくのも忘れるほど攻め続ければ、例の凶撃は出せない。その隙を与えさえしなければいい。受け止めれば手は痺れるし、よけるにしたらって、ビルは虚を衝くのがうまい。先の回避だつて、間合いがあつたから成せたものだし。

俺の連撃はことごとく弾かれた。

そーいえば、ビルは動体視力が良かったなー。

「そんなんじゃ、ちつとも当たんねえなあ！」

無駄口叩く余裕付き。面白くない事至極。

ビリー＝マクライニ。聖フィルデナント教会オーナー。サヤちゃんの雇い主。運動神経抜群。人を見下した態度が気に食わない。細目で釣り目。オヤジはどうしてこいつを育てる気になったんだろ。だって嫌味なヤツじゃないか。こいつと一緒にいて楽しかった事なんて一度たりともない。邂逅を果たしたところで懐古の念など皆無で閉口。むしろ会いたくなかった。嫌悪に虫酸。注ぐ殺意が勿体無い。

ガキン！ 火花に怯む事なく繰り出す刀。腹に痛烈な痛覚。こりやますますヤバイかも。

ガキッ！

刀が重なり、交差する向こうで。

「そろそろ死んじまえ」

ビルが嗤う。

「ひいやあつつつほう！」

哄笑とともに 刀が左下に弾かれる。生じる隙。振り上がるビルの腕、反る細身。「iiiiiiiiいやつはあああああ！」

勝利を。絶命を。必殺を確信した咆哮。腹筋をバネにした凶撃が放たれ

！

「遅いんだよ、ビル」

振り下ろされる間もなく、俺の一閃はビルの身を裂いた。

「あっけないもんだなあ」

仰向けで倒れたビルの声は、弱々しく震えていた。

刀を弾かれる事なんて、容易に予想し得た。しかしながら、そこに生じるであろう一瞬の隙を狙ったのは、俺にとっては賭けだったわけだ。もしもビルが、渾身の一撃（仮に一刀両断と名付けるとして）の他にも必殺かつ自信ある一撃を持っていたのなら、結果はまた違ったと思う。こうして立っているのがビルで、倒れているのが俺という図になってたろうね。

けれど、剣を交えてみたところでは、他の一撃があるとは考えられなかった。何より、接近して斬り合ってる中で一刀両断（仮）を放つくらいだし、あんな、使い方間違えれば無防備極まる危なっかしい一撃、動体視力と反射神経と己が剣の腕に絶大な自信を持つてなきや、普通は使わんし。

結果、ビルは絶大な自信を持っていた。

そいでもって、それはまったくもって考慮内だった。

だからこそ、俺はわざと刀を弾かせた。

「死んでく感じて、こんななんだな。初めてだ」

「そりやそーでしょ。不死身じゃないんだし」

「ひやははっ、ちげーねー」

吐血するビルを見下ろすのは、たとえ嫌いなヤツとはいえ、いい気分じゃない。

「おまえの」

ビルの目は、天井を見上げたまま動かない。唇から頬へ、唾液交じりの血を伝わせながら、それでも唇は動く。

「おまえの、最後の一太刀……ありや、何だ？」

「ああ、居合い抜き？」

「何だそりや？」

「何、と聞かれると困るんだけど　速いんだ、一撃が」

我ながらわかりにくい説明だっと思う。ビルは苦笑した。

「わかりにくいな」

「同感」

「そいつを撃つために、わざと弾かせたってか」

ありや、バレてる。

「体勢崩したと思ったのによ」

脇に抱えるように刀を構え、鞘から引き抜くように切る　居合い抜き。刀を弾かせたのは、一刀両断（仮）を誘うためと、自然に居合い抜きの構えにシフトするため、2つの意味があった。居合い抜きであればビルの刀よりも早く切れると、受け止めた

時に感じたのだよ。

「じゃ、ビル。俺、そろそろ帰るわ」

仰臥するビルに背を向ける。足元に転がっているビルの刀を一瞥。

「冷てえヤツだな。今際の際まではいてくれねーのか」

「その必要がないから」

脱ぎ捨てたコートを拾い上げ、袖を通す。

「だって、ビル。致命傷じゃないから」

「……………」

「……………」

「……………は？」

案の定、ビルは目を見開いて俺を見た。

「血吐いてんのか？」

「さすがに、そのままい続ければ死ぬよ。部下を呼んで、手当てすれば命は助かる」

「血吐いてんのか？」

しつこいやツだ。めんどくさいと感じながらも、歩を進めながら律儀に答えてやる。

「血吐いたって、それでも生きてる人はごまんといえるよ」

ギツ ドアを開いた。外から冷風と雪が吹き込んで、あまりの寒さに身震いする。

「友人のよしみだ、命だけは勘弁してやろうって事」

「ひやはっ」

ビルは吹き出した。

「いらねー事しやがる」

「手当てしないでそのまま寝てたら、ほんとに死ぬからね」

「どうしてだ」

勇を鼓して外に出ようとした時に、ビルの責め口調。嘆息しながら振り返る俺。

「単なる殺し屋じゃないんだよ、俺は」

「何だよ、そりゃ」

「さあね。けど、そーゆ事。せいぜい生き永らえなさい」

今度こそ、雪の舞う白銀の世界へ飛び出した。

「おつかれさまです」

「……どっか行っただと思ったら、ひょっこり戻ってきやがる」

「ひどい傷ですね」

「死ぬほど痛えよ」

「死ぬほど痛そうです」

「何しに戻って来た？ おまえへの依頼は終わってんだ」

「まだ仕事が残ってたので」

「聞いてねーなあ」

「そりやそうです。教えてませんし」

「何だ、その仕事って？」

「知りたいですか？」

「その前に、部下を呼んでくれねーか？ 手先が痺れてきやがった」

「呼んで、どうするんですか？ 手当てなら、私でもできますよ」

「ひやは！ 違うねえ。そんなんじゃない」

「ありや、ハズレですか」

「俺はやツに負けたんだ、これ以上生きてたって仕方ねーのよ」

「つまらない考え方ですね」

「そうかい」

「私だったら、勝つまでぶつかります」

「そうかい」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」それです」

「はい？」

「やり残した仕事があるって言っただろ？」

「あ、その話ですか」

「俺に関係してつから戻って来たんじゃないの？」

「まったくもって、その通りです」

「じゃ、聞いてやる。何だ、その仕事ってのは」

「先代オーナーからの伝言です」

「……………」は？」

「あの人、死ぬ前に仕事を依頼してたんです」

「ひやはは！ あのジジイ！ そう来やがったか！」

「ただじゃ死にそうにない人でしたから」

「違えねえ。それで、何だつて？」

「『俺を殺しといて、生きてられると思うな』」

「……………食べねえヤツばかりだな」

「……………」

「寒くなって来たねえ。ルシールの冬は、これだから気に食わねえ」

「……………」

「タバコ、吸ってもいいか？」

「堂内は禁煙です」

「カタいねえ」

「おやすみなさい」

「……………クソが」

寒い。

寒い。

あー、寒い。

はらはらと舞う雪は、世界を白く霞ませる。曇天は空の高さを曖昧にさせているし、積もった雪が、運ぶ足を絡み取ろうとしているし。……………まったく、怪我人を労わる気持ちを持って欲しい。

腹の傷はやはり深いみたいで、しかもかなり出血していたみたいで　さつきから足元が覚束なかった。なんだか頭がフワフワする。

これは、ちよつと、ヤバイかも。

雪道にわずかにへこみとして残っている、2人分の足跡　サヤちゃんと歩いた道を戻ってみると、意外と距離があるのだと感じた。来た時はサヤちゃんがいたから、話しながらヒマを潰せたけども、今、俺は1人　独り。いっそ、歌でも唄って孤独感を紛らわそうか。

……………何を唄えと。

雪、無音と足音、孤独。それと、血。

こんだけ寂しい状況でマッチする唄を、俺は知らなかったりして。

……………唄えないじゃーん。

「わつと」

とうとう、ただでさえふら付き頼りなかった足が雪に取られ、俺は積雪にダイブ。頬に当たる雪は馬鹿みたいに冷たくて、むしろ痛い。このまま眠ったりしようものなら確実に死ぬんだろな！

いかんいかん。

起きなきゃ、立たなきゃ、歩かなきゃ、帰らなきゃ。

日本の腕を雪に突き立てて、両膝で腰を浮かせ　　かくん　　肘が折れ、立てた膝が伸び、前方の雪に顔から突っ込む。

「……あれ？」

ウソみたいに、体が動かない。力が入らない。

「……あれあれ？」

動かして見た手は、指先が痙攣するだけで、雪を握る事すら叶わなかった。

……いやー。マジヤバイっす、俺。

寒さに唇が震え始めた。奥歯が力チ力チ鳴った。雪に埋めた顔を、苦勞して右に回す。顔左半分を雪に埋ずめ、右半分に雪が落ち、吐いた息が白く震えた。

さて。ここでクエスチョン。

私はどうなるでしょう。

アンサー。

このまま問答なんて無用に雪が降り積もって、私は凍死する事でしょう。人型に盛り上がった積雪を見付けてくれる気の毒な人がいるか、はたまた、雪が溶けるまで見つからないか。

そう、問題は。

凍えた俺の身体を見付ける、気の毒な人がここを、いつ通るのかという差異のみ。

気の毒なあなたにささげる、愛の言葉。

ご愁傷様。

雪に埋没していない右目で、空を見上げる。視界一面グレーを背景に大粒の白、白、白。虎視眈々と、しかし確実に俺の体温を奪おうとしている雪は、かくも綺麗に目に映る。舞い落ちる様は純粹で、落下地点の定まらない浮遊感は魅力的で、身体に積もるわずかな重みは寛容で、包容力があって、優しく冷たい。

こんなにも。

こんなになってもなお、雪を愛しく感じるなんて。

雪が嫌いだった。

オヤジの死を思い出すから。

雪が嫌いだった。

オヤジの断末魔を、きつと吸い込み無力化しただろうから。

雪が、嫌いだった。

嫌い、だったのに。

眠い。眠い眠い眠い眠い眠い眠眠眠眠眠眠眠眠……

ざくっ ざくっ ざくっ

……空耳かな。こんなに雪が降ってるってのに、足音が聞こえる。雪を潰し平たく固める足音が。

ざくっ ざくっ ざくっ。

近付いている。幻が近付いている。

あー、これはきつと天使さんだ。最期に現れる天使さんだ。かの名作にも現れる、少年と犬を天国に誘い導く……あれ？ 天使さんだったら、こう、空から一筋の光が降りて来ておかしくないのだけでも。

そもそも、天使さんなら羽で飛べるはず（イメージ）。

だったら、あれかい？ 死神さんかい？

とか何とか考えている間に、足音はすぐ間近にまで近付いていた。

ざくっざくっ。

「こりやまた、手酷くやられたもんだ」

天使さん（♀ 死神さん）は、予想に反して女声で零した。

「しかもかなりの出血量。これじゃ、凍死よりも失血死の方が早いんじゃない？」

呑気なもんだ。足音が止んだのと、声の具合から彼女が傍らにいる事はわかるけども、顔を上げる事すらできない俺。

「生きてるかー、キアー？」

天使さん（♀ 死神さん）は俺の名を知っているらしい。

「おーい？」

ざくっざくっ 体の右側に迂回してくれたおかげで、その姿が視界に入る。顔を覗き込んで来た天使さん（♀ 死神さん）は、ダークジーンズにダウンジャケットという、いたってラフな出で立ち。足元はロングブーツだった。肩まで伸びた後ろ髪、目

元で揺れる前髪。瞳は大きく、通った鼻梁を携えた顔は精悍そうで、奇しくも、俺の知人と同じ顔を持っていた。

「やあ、天使さん」

「誰が天使さんだ」

「じゃあ、死神さん？」

「その鼻頭、踏み潰して欲しい？」

「どうやら、どちらでもないらしい。だとすれば、この女は。」

「シスターが、どうしてこんな所に？」

吐いた声音は、自分のものなのか疑わしくなるくらい弱々しかった。

「エリヤが心配してたよ。だからこうして、私が来たんだ」

「自分は来ないなんて、エリヤの薄情者」

「もしも危険なシチュエーションだったらどうすんの。そんな渦中にエリヤを巻き込みたくないでしょ。それでも行くって聞かないもんだから、ベッドに縄でグルグルと」

「S気質」

「愛よ」

平然と言いのけ、笑うシスター。

「ねえ、シスター」

呼吸が浅くなっていた。吐息短く、彼女に請う。

「懺悔してもいいかな？ 嫌だと言うのなら、独り言として聞いてもらって構わない。むしろ聞き流してもいいくらい」

彼女は呆れたような、とても微妙な表情を浮かべた。

「あんたね、懺悔よりも手当てする方が先だってわかんない？ 手当てした後だったら、いくらでも聞いてあげる」

「いいんだ。懺悔したいんだよ。今だからこそ。治療なんていつでもできるけど、その後に懺悔したいって思わないだろうし」

「どうして私の周りの男どもは、こつも頑ななヤツばかりなのかしら」

「誉め言葉として受け取るよ」

「どういたしまして」

シスターの言には嫌味がたっぷり含まれていたけれど、どうぞ、と促してくれた。俺、ビルに本当の事を言っただけだったんだ」

もう寒さなんて関係なかった。寒さなんて感じない。

「ビルは、オヤジを殺したのが俺だなんて考えてたみたいだけど」

死んでく感じ　　ビル of 言葉を実感しながら、シスターを見上げる。真っ直ぐに。
「すべては計算通りだったんだよ」

そうなんだ。事は思った以上に計算通り。

「あいつが絶大な信頼を置いていた人間に偽りの事実を告げて、ビルに情報が流れるように仕組んだのは俺だよ。たしかに情報は財産かもしれないけど、それが真実とは限らないんだよね」

確実な情報こそが財産になり得る。虚言なんて単に、偽りなくゴミだ。だからこそ、ジョーイは事実を欲した。虚言を呈する代償としての事実を、俺は支払ったのだった。

「殺したのは俺じゃない」

変わり果てたオヤジの姿を目の当たりにした時、絶望に俺が叫んだ事を憶えているかい、ビル。

「オヤジはね、自分の後継者を見付けたんだ。でもって、そいつに試験を与えたんだよ。話自体は、極めて簡単な事なんだ。ただビルが、そいつを知らなかったただけ」
ビルは知り得なかっただけ。

そりゃそうだ。そいつはその時まで、オヤジとは何の接点もなかったんだから。一目見ただけで、オヤジは惚れ込んだんだと言っていた。

そして、殺される事になる直前に、オヤジは俺に託した。

そいつの友人になり続ける事を。

「試験ってのはね、オヤジを　　オヤジを、完膚なきまでに屠る事だった」

結果、オヤジは屠られた。

それこそ屠り尽くしようのないまでに。

痺れを切らしたシスターが、口を開いた。

「　時間切れよ、キア。これ以上しゃべってたら、本当に死ぬわ」

「もう少しだから、話させてよ」

「うんざりするくらい頑固ね」

「ありがとう」

眠い。睡魔に覆い被されてる気分。きつと5、6匹はいるに違いない。だって体が重いし。

睡魔に驚づかまれてる脳でも、唇は動く。俺が今まで、誰にも告げなかった言葉。ひた隠しにし続けた音吐。

「試験に合格したそいつは、オヤジの剣を託されたんだ。　　殺される時、オヤジは何を思っただろうって今でも考えるよ。復讐なんて、やろうと思えばいつでもでき

た。だって俺は、そいつの傍にいたんだから」

俺の傍にいて、オヤジの一枚鉄の刀を持っている人物。

シスターの目が、渋いものを口にしたように細まる。

「ご名答だよ、シスター。」

「オヤジを殺したのは、俺の唯一無二の友人だ」

俺は深く息を吸った。

圧迫されたように肺が苦しくて、大きくは吸えなかったけど。

「こんな事、ビルに教えられる？ あいつの事だ、すぐに友人を殺しに行くよ。だって、俺を恨み、続けて、くれ、れば……」

意識が遠退く。

これで眠れる。

深い睡眠へと。

暗い情眠へと

「安心なさい、キア。あなたは救われるわ」

落ちる間に、シスターの言葉を聞いたような気がする。

「Two DOGs and the DOG」

Written by nakoso

© nakoso 2009

Release Date 2009/08/31 on Bottle Novel

<http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>

Twitter (as inabetz) :

<http://twitter.com/inabetz>

Mail :

nakosokan@gmail.com



「Two DOGs and the DOG」 by nakoso is licensed

under a Creative Commons 表示-非営利 2.1 日本 License.

Based on a work at <http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>